

日本の住宅技術と住宅産業

4.

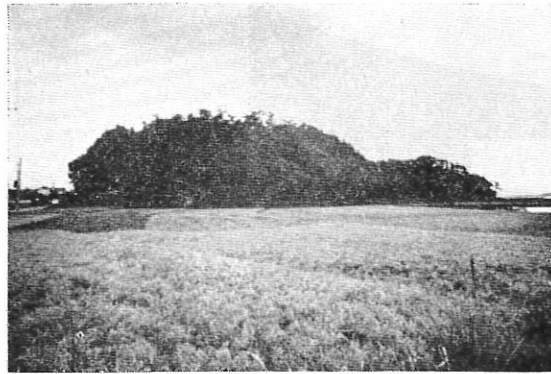
日本の住宅産業組織

広瀬 鎌二

わが国で建築の専門化が始まったのは、寺社に付属する工人達が座を結成した平安朝末期からと見られ、その後さらに中世になつて寺社や宮殿、高級住宅等を請け負う高級大工と、一般在野の工人の階層に分れていつた。今回は、日本における住宅産業組織の成立、材料と技術、建築産業の性格、住宅産業の体質などについて述べる。

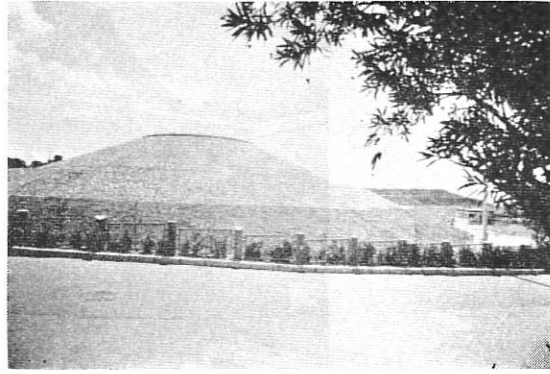
建築技術 1977. 9
No. 313

箸墓



4世紀*奈良県桜井/前方後円墳

五色塚



5世紀*兵庫県垂水/前方後円墳復原

4.1 組織の成立

縄文時代には、技術的職能の分化は行なわれていなかったと見るのが妥当であろう。中期後半からは土器や石器の生産や、他地域との交流が行なわれた形跡はあるが、確認はされていない。

縄文の土器は、窯を使わず広場などの焚火で焼かれたと考えられているし、石器も材料を産出する地域で多数の製品や石核が出土した例もあるが、そこが専門化された工場であったかどうかは断定できない。

竪穴住居も、その規模からも、また推定される構法から考えても、特別に専門職の養成が必要であったとは思えないし、専門化するだけの需要があつたかどうか疑問である。むしろその後のやや確かな組織化の過程から考えて、家はその家族或いは部落の人達の協同で作る習慣であつたとしたほうが自然であろう。

建築や土木工事が、組織的な労働力を使つて行なわれなければならないとなつたのは、やはりもの文化との接触があつてからである。

弥生時代には、遺跡の状況から見て、まだあまり大規模な建設工事を必要としていたとは思えないし、国家的な規模で支配者と非支配者の関係も確立していなかつたであろうから、まだ産業としての専門化は、金属器の製作程度であつたと思われる。

これが大きく変化するのは、4世紀はじめと推定されて

いる、中央集権国家の成立からであろう。現代史学では崇神王朝をこれに当てているが、現在の桜井市と天理市の間、大和盆地の東、三輪山の附近にある柳本古墳群が、崇神朝のあつたところとしている。

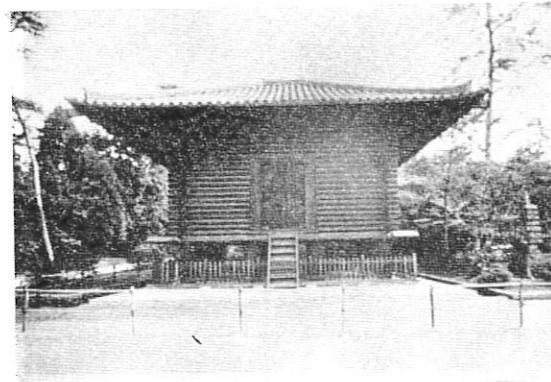
ここには、箸墓をはじめ、崇神、垂仁、景行など多数の前方後円墳や前方後方墳が密集している。この巨大な墳墓を構築するためには、少なくとも二つの条件を満足しなければならない。ひとつは膨大な労働力であり、もうひとつは、土木技術である。

この前方後円墳を築くのにどれほどの労働力が必要であつたかということ推定させる記事が、日本書紀の崇神天皇の条に「箸墓を外装するために使う葺き石を、大阪山（現在の二上山で当麻寺のあるところ）から手送りで運んだ」ということがでている。二上山から箸墓まで奈良盆地を横断して、人の列を作り、石を運んだわけだから大変な人数を動員したことになる。

この記事は明らかに強大な権力を持つた王者の出現を告げているし、現存する巨大な墳墓はこれを裏付けている。さらにこれらの墳形は、きわめて整然とした幾何学的な形をしているし、寸法や比例関係も正確に作られている。当然ここに優れた技量を持つた土木技術者の存在を認めないわけにはゆかない。

崇神王朝の成立は、自然文化からの文化への最初の明確な転換を意味している。崇神が征服王朝であるといわれる論拠もここにある。すでにそれより半世紀前、3世

唐招提寺経蔵



8世紀*奈良市/校倉造り最古。

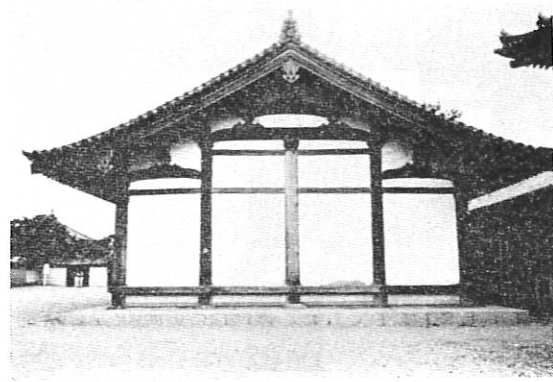
紀の半ばに中国との密接な交流があつたことは、邪馬台国論争でよく知られているが、魏史倭人伝の記事から推察できる当時の我が国の状況は、多分に自然文化的であつたのが、わずか50年でこんなに変貌するにはそれなりの理由がなければならぬとするのは当然であろう。当時の王権がこれだけの動員力を持つていたとすれば、当然宮廷諸施設の建設にも、それなりの技術と労働力が使われたとしてよいだろうし、何らかの形で組織化が行なわれていたと考えることができる。

同じ奈良地方の弥生時代遺跡で、唐古池の発掘があるが、ここから出た木製品には、心去り材が使われていたということだから、もともとこの地方の農民達の中には、かなりの技能を持つた人達がいたことも確かである。柳本の宮殿はこれらの人々を動員して造られたのであろう。しかし建設関係の組織についての確かな資料は、7世紀まで待たなければならない。

6世紀末最初の本格的寺院建築である飛鳥寺は、はじめ蘇我氏の私寺として着手されたが、途中からこの工事に朝廷が割り込んで、東漢を法興寺（飛鳥寺）寺司に任命、事業の推進をしている。

この法興寺寺司が、記録に見える官営建設組織の最初である。ということは、これ以前にはこの飛鳥寺に匹敵するような大建設事業は、墳墓の建設を除いてはなかつたし、寺院は墓にくらべてずっと複雑で高度の技術を要する仕事であつたので、この飛鳥寺を指導した百済の技術

法隆寺仏法堂



8世紀*奈良市/法隆寺東院
内部/天井なし、小屋裏現わし、仏殿に床張り。伝橋夫人邸。
外部/切妻、2重虹梁カエル又の基本構造がわかる。

者の助言があつたのかもしれない。

また東漢は、その名が示すように帰化人の一族であり、中国風の建築の施工法にも通じていたことも考えられる。このことはその後、舒明朝の大宮建設にはじめて造宮司を設けたが、このときも倭漢書直県を大匠に任じているし、難波宮の造宮司も倭漢直荒田比羅夫を将作大匠にしているところから、漢氏が建築の専門技術者として朝廷で特別な仕事を担当していたことがわかる。

推古32年（624）には、寺院46、寺僧816、尼569を数えたといわれる飛鳥時代の伽藍建設の盛況を背景に、百済大寺の建立のさいに設けられた造宮寺司四等官の制定以後の急速な建築技術の発展と消化吸収には、この漢氏が重要な役割を果たしていたのではないだろうか。

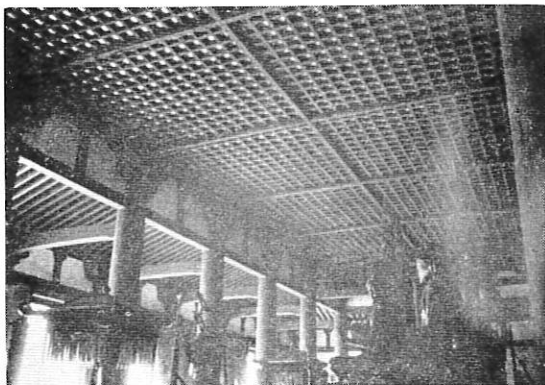
こうして官の組織は次第に整つていつたが、実際に建設に携わつた職人達は、必ずしも完全に組織化されていたとはいえないようである。8世紀の平城京には、造平城宮司に、宮内省木工寮があり、主として新築の建物の建設を行なつていた。また神亀5年（728）には内匠寮を、さらに767年には修理を担当する景雲修理職が設けられている。この他中央の官営工房にならつて、地方にも国衙（が）の工房が作られていた。

これらの官営施設で働く職人は、少数の官位を持つた官吏は別として、大半は強制的に徴集された農民達であつたし、これらの農民に与えられた仕事は、彼等の日常の生計のために行なう仕事とは関係ない、いわば素人の集



法隆寺仏法堂

法隆寺大講堂



10世紀*奈良市法隆寺西院
内部/天井梁下面に組入れ天井を張る。

まりであつた。
強制的に徴集されたとはいつても、奴隷ではなく、税の代りに労働を提供したのである。しかし実状は地方官が中央の要請でかなり強引な人集めを行なつていた。こうしたことが原因して、貴族や寺院が私有地を拡大して、莊園を持ち、農民の中にも次第に階級分化が進み、中央の権力が弱くなつた平安時代には、長岡京の建設が反対勢力の抵抗にあつて、計画どおりに進行しなかつた例に見られるように、官営の建設組織は事実上崩壊せざるを得ない状態になつていた。

8世紀当時の我が国の状況は、武蔵国分寺の周辺に多数の竪穴住居があつたように、青丹よしは、平城京を中心とする官営や貴族が建設した、寺社宮殿の類に限られ、当然中央と地方、支配者と非支配者の間には格段の差があつたし、前述したように、工事を直接担当した労働者は素人の農民であつたから、技術水準はそれほど高くはなかつた。

だが官営の工房や地方国衙の工房で働かされた農民達が、中央の進んだ技術を身につけていつたことは当然で、この経験が、その後中央権力の衰退とともに、強大になつた貴族や大社寺に代表される莊園地主が、それぞれ私有の工房を持ち、職能に応じた技術者としてこれに吸収され、専門化していく下地になつていた。

中世には国衙が開催する市に産物を売り出したり、木材を売る商人が現われたり、寺社の工房に付属した工人達

によつて建設業が組織されたりして、建設産業の初期の形が整いはじめていた。

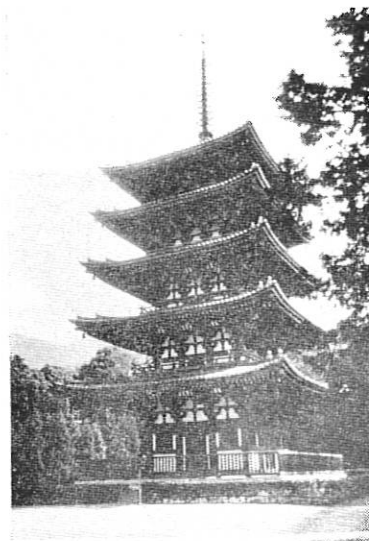
建築が専門職でない農民の作業から、専門化された専門職に移した時期は、平安末の寺社に付属していた工人達の座の結成からとするのが妥当であろう。これまでは建築の技術は、官営の建物が主であつたこともあつて、ほとんど地方差のないかなり徹底した中央指導で進められた形跡があるが、このころから次第に地方色が現われはじめる。

もちろんこれは、官庁、社寺建築についてであつて、一般庶民の家は、古くからのしきたりどおり、特定の専門職ではない、村の人達によつて作られていた。

南北朝時代以後は、座の工人達は、莊園領主の統制を離れて、他国に出稼ぎに出るようになる。こうなるともう官営組織は完全に崩壊して、専門化した工人達がそれぞれ独立した生計としての専門職を営むようになり、同時に庶民生活も古代にくらべるとはるかに豊かになる。農民が竪穴住居から、高床の住居に変わるのもこの頃からであろう。

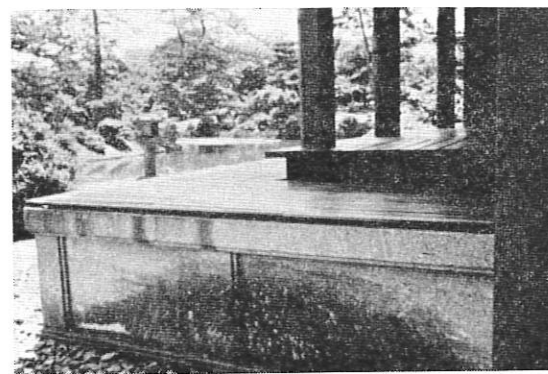
だが、古代的な官営組織のなごりは、この後も建設業関係の専門工人の大半が、宮廷貴族や大社寺に付属して、これら強大な権力者の保護のもとに、生活していたのを見ても、根強く残つていたのである。

これが伝統の技術の継承と発達に、多大な貢献をした反面、建設業が庶民側より権力側の意向に傾きやすい體質



醍醐寺五重塔

平等院鳳凰堂



10世紀*京都府/1層の床を板張りにするなど各所に実験的手法が見られる。

11世紀*京都府宇治
外部基壇上面まで床板張り、すのこ敷きにする。

を、現在でもまだ捨て切れずにいる潜在的な要因になつていのではないだろうか。

4.2 材料と技術

縄文時代の建築生産については、一般に想像されているよりも、かなり進んだ技術を持っていたのではないかと推定しておく以上のことは、資料の乏しい現在ではできないが、弥生時代前期に導入された木工用鉄器の使用が、さらにその技術を発展させたであろうことは、高床建築の実施などによつて知ることができる。また弥生時代中期から後期にかけて、石器の出土が少なくなる事実も、鉄器の使用が一般化したことを裏付けていると考えてよいだろう。しかし前述したように、弥生後期ではまだ建築が産業組織化するまでには至つていながつたし、邪馬台の連合国家も強力に中央集権化するほどの力を持つていながつたようである。

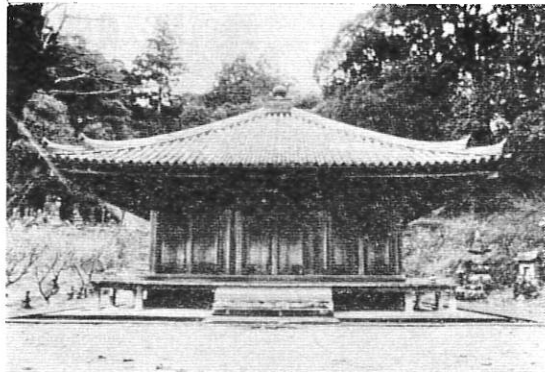
採集から農耕への大きな転換があつたとはいえ、耕地に密着する農民とその部落集団が必要とする需要を適当にまかなつていればよい、自然文化の延長上にあつたのであるが、このことはこれらの農民達が、権力社会の生産組織に組み入れられる初期の段階で、建設関係では特定の個人的な専門化が行なわれなかつたのは、弥生時代にはすでに、原木をクサビで割つて板材や角材を製材したり、ナダや鉦(やりがんな)、ノミなどで仕上げ加工を施す技術を持っていたことが、前期古墳から出土するた

くさんの木工具類で明らかであり、唐古遺跡や山木・登呂などの弥生遺跡に残された木材が、意図的に心去り材を使用していること、カシ・スギ・マキなど木目のとおつた加工しやすい木材を選んでのことなど、これら基本的な木材の利用技術を、生活に必要な知識として、誰もが身につけていたからではないだろうか。

5世紀には部民制が行なわれ、玉類の玉作部、金属工芸の鏡作部が、主として宮廷貴族のため装身具を製造するために設けられるが、玉作工房跡が、石川県片山津、千葉県八代、島根県松江など各地で発見されているところから、これらの生産が集中して中央で行なわれたのではなく、原料生産地に依じた地域の産業としての性格を持つていたと考えられる。このほか土師器から須恵器の生産に移行するのも5世紀であるが、これも各地で大古窯群が発見され、須恵器の量産が行なわれていたことを示しているし、塩の生産もこの頃から盛んになつていいる。これらの事例から、専門化による産業の組織化は5世紀頃からはじまり、専門化が生産性を向上させ、余剰物資が工房管理者によつて、交易品として流通しはじめること、その収益で地方豪族の経済力も向上し、各地に大規模な古墳が造られ、古墳最盛期が現出したと考えることができる。

4世紀初頭に突然姿を現わした前方後円墳の成立については、各説あつて一定せず、いまだに謎に包まれたままであるが、その築造に使われた技術が、きわめて高度で

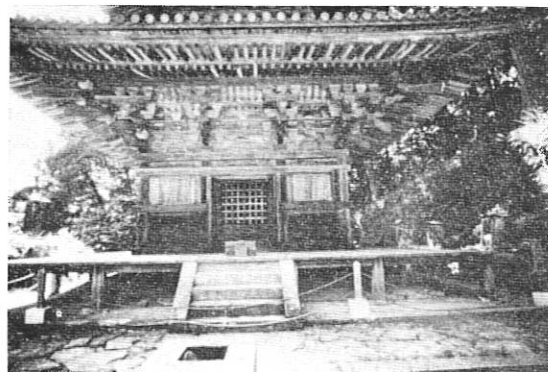
富貴寺大堂



12世紀*大分県
外部に縁を回らし高床になる。内部も化粧天井を張る。

あつたことも、解き難い謎のひとつとされている。いまは鬱蒼とした樹木で覆われ、小山のように見えるが、完成した当初は、整然とした幾何学的な形で、全面を玉石で葺いた、無機的な造形物であつた。兵庫県垂水にある五色塚が最近完全復原されたので、実物を知ろうえでよい参考になる。これだけ巨大な構築物を作り上げる技術は、中国にもその先例がないだけに、単純な技術導入とは考えられないし、弥生時代墳墓との関連にも疑問が多い。ただ4世紀に畿内付近からはじまったこの墳墓の構築技術は、はじめ強大な中央集権国家の象徴として作られたのが、これに動員された農民や地方豪族が、その後交易産業の発達によつて経済力を付けるとともに、地方へも伝播したということはいえるようである。この古墳からは各種の木工具が出土している。前期の初めのものからは鉋や金槌(づち)などが、前期後半には鋸(かすがい)、釘、砥石、手斧、ナタ、錐(きり)などがあり、ノミも前期後半から目的別の分化が見られるし、鋸も前期から発見されている。これらの道具類は、その後中世までほとんど変わっていない。奈良時代になつて、建築関係の官営組織が作られることは前述したが、造寺司の編成は、造仏所、鑄所、木工所、造瓦所、山作所で構成されていた。ここで働く工人達の主体が農民であつたことも前述したが、司工として官から任命された官人でも、長上工で従6位、番上工匠で従

一乗寺三重塔



12世紀*兵庫県
第1層が仏殿風になり、塔も高床になる。

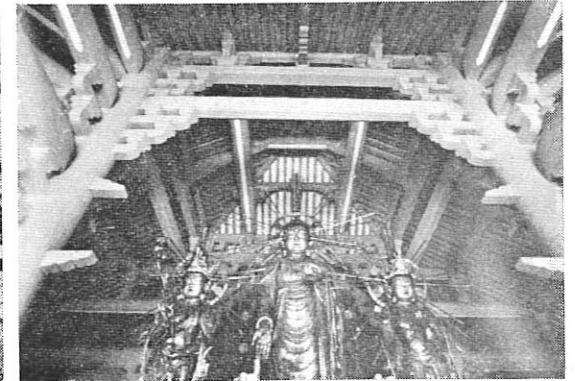
8位から末選という比較的低い官位しか与えられなかつたし、技術者は事務系長上官の指揮下にあつた。このことは恐らく、技術は先にも書いたように、農民が誰でも持っている知識であつて、特殊技能とは考えられていなかつたし、当時盛んに建てられた寺院や官庁建築は、中国建築の模倣であつたから、特に専門の知識が必要だとは考えられていなかつたからではないだろうか。こういう技術者を社会の重要なポストに置かないという習慣は、その後今日まで我が国の社会通念として受け継がれていることは前回にも述べておいた。8世紀の造寺司の具体的な作業内容について、福山敏男氏の詳細な研究があるので引用させていただくと、石山寺建立の場合に、加工場として設置された工作所は石山寺山作所「領、司工、雇工(農民)、仕丁、雇夫(農民)で構成」。用賀工作所「雑材、桧皮の採取」。田上工作所「領2人、司工2人、鉄工1人、雇工3人、様工6人で正角、角、平角、板、細木等約百石を25日間で作る。その他仕丁4人、雇夫10人が材の運搬を行なう」。田上大石山「桧皮、桧薄枝を採取」。高島山作所「杉薄板を採る」。立石山、小石山「黒木、楮(細い枝)を採取」。となつていて、これは下ごしらえの作業である。現場作業については、法華寺本堂(7間×4間)の例があつて、地鎮祭、基礎工事(大阪の白石を敷く、雇石工1,695人)。基壇(壁石・束石・葛石・階段・戸下石・敷石・礎石等春日山の石を仕上げる、雇石工108人)。木部構作(足

浄土寺浄土堂



12世紀*兵庫県小野
外観/天竺様の典型。高床である。
内部/天井は張らず、構造がそのまま現われている。

場・柱作り38本、木工188人)。瓦葺(生瓦作り、雇瓦工3,012人、瓦窯2煙作り、雇瓦工79人、飛えん極鼻飾り用玉瓦、雇瓦工680人)。壁塗り(下塗り・中塗り・上塗りの雇土工90人)。装飾金物(火作り・真作り・砥みがき・毛彫り・魚子うち・金泥・漆塗り・金箔・採色)となつているが、これで見ても大半が雇工である農民によつて作業が行なわれていることがわかる。平安時代になると、早くも中央の支配が弱まる徴候が見えはじめる。大宰府、武蔵国分寺など各地の官営建物が焼亡したり破損したりしても、そのまま放置される例が多くなつたため、延暦年間から大同にかけて、生産官司の整理を行なつている。これは全国を支配していた王権の事実上の後退を意味しているのである。これに対して、摂関政治による造国制の開始は、官営の建築も諸国の国司や、寺院の造国司の手にまかされることになり、官制の修理職や木工寮は独立性を失ない、大工、小工、のほか権大工、権小工などがふえて、造国司から作料をもらう私的な関係が生じ、官制建築組織は実質的に崩壊する。こうして官が独占していた細工所の機能が分解すると、これが庶民の間に移行して、農民でも官吏でもない、技術だけで生計をたてる階層が生れる。平安中期頃からとされている。建築ばかりでなく、当時生活のあらゆる面で重要な資源であつた木材は、土や石と同様に天然の資源であつて、

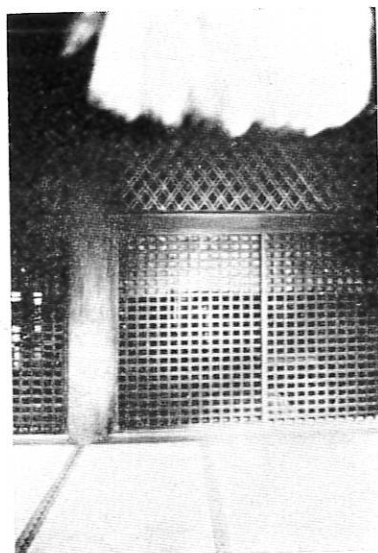


私有されるものとは考えられていなかつた。したがつて必要に応じて採取は自由であつたが、7世紀以後相次ぐ堂塔伽藍の建設や都城の造成によつて、木材資源が欠乏してくると、まず伊勢神宮が神宮山、高倉山を伊勢柚として専有化したように、朝廷によつて柚が指定され、さらに生産の実権が荘園領主に移ると、公家や社寺が自由な伐採を禁ずる私有の柚を持つようになった。柚は畿内だけでも、大和3、伊賀11、近江5、山城2、丹波1、周防1の23か所あつたが、いずれも良材を産出する森林である。平安時代の建築工の身分は、作業に対する利益配分を自分の名前で受け取ることができる、親方分・オトナ・上首・器用者と、親方に従属して、親方から利益配分を受ける、弟子分、末輩分、若輩分、不器用者の別があつた。この関係は、その後の建築職構成の基本になつている。曲尺の√2目盛りを、裏目として刻み、隅木や垂木勾配の割出しを容易にしたのも、尺杖を使つて高さをそろえることができるようになったのも、鎌倉時代中期からである。永仁4年(1,296)には京都に410名以上の大工がいたといわれ、そのほとんどが、両賀茂神社、法成寺、建仁寺に所属していたが、それぞれ宮造り、和様造り、唐様造りを得意とし、これらの建築様式の伝承に大きな力を発揮した。唐様が全国的に普及して長く当初の形式を維持したのに対し、天竺様が重源一代で衰亡したのも、栄

聖霊院



13世紀 * 奈良市法隆寺西院
外観 / 中世, 住宅風仏殿の初期の形。
内部 / 内陣と外陣を仕切る格子戸・引戸の最古の例。



西が建仁寺唐様大工の組織化に成功し、重源の後を継いで東大寺勸進になったことが、直接の原因ではなかつたかとも思われる。

4.3 建築産業の性格

近世以後の建築組織は、中世に成立した寺社に付属する建築工を中心とした、社寺や宮殿、高級貴族の住宅を請け負い、各々流派を立てて腕を選つた大工達と、地方国衙の細工所や官営の山作所で技術を覚えた農民の雇工が農耕の傍ら近隣の需要に応じて工事を請負つたり、大工事のさいの雇工として働いたりするなかから、建築業を専業とするものも現われ、社寺に専属する高級大工のやらない仕事を請ける、一般在野の工人との二つ階層に分かれた。

このうち、前者は近代では宮大工と呼ばれ、戦前までは各地の大社寺の保護下で、伝承の技術を守つてきたが、戦後の自由経済は、社寺に対する特別な国家の保護もなくなり、この優れた技術が伝承される保証は全くなつてしまつた。わずかに文化財の修理工事によつて、細々と余命を保つている状態である。

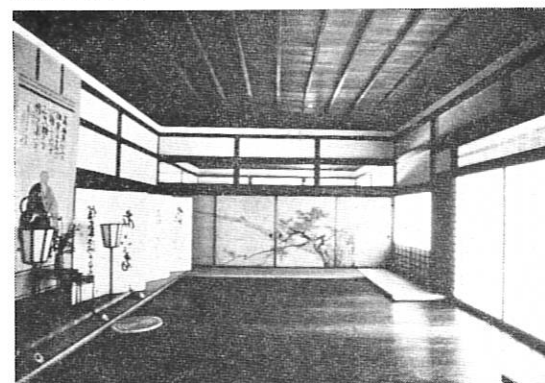
一方在野の建築工は、明治革新によつて藩幕制の解体が行なわれ、武士に代つて経済力と政治力のある商人達が台頭すると、拡大する建築需要とともに、かつての階層的ヒエラルキーから解放されて、専業化した建設業としての社会的位置を確保していつた。

しかし、中世以来の請負制度はそのまま受け継がれ、江戸期の棟梁を長とするピラミッド組織や、親方分と弟子分の関係など、基本的な体質は変わらないま今日に至っている。

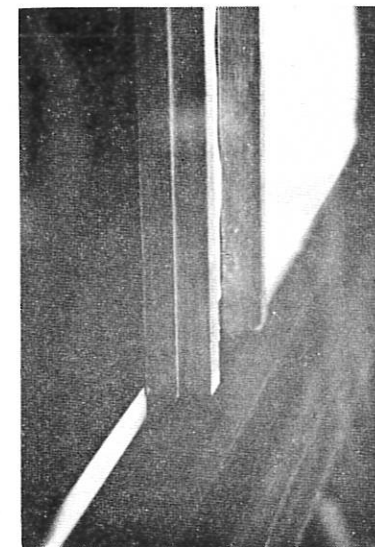
西欧文明の導入を目標にした明治維新以後の我が国の建築界は、当然のことながら積極的な西欧技術の受け入れを行なつている。このとき導入された新技術として、煉瓦造と石造があるし、木造でも洋館建てという新しいスタイルの建物がはじまる。

現在残されている明治時代の建物を見ると、設計は内外人さまざまであるが、施工したのは日本の大工達であり、恐らくこの直接工事を行なう職人達の理解を越える技術は使われなかつたと思われる。当時の西欧建築が、もつぱら形の表現だけを目的にしていたからでもあろうが、構造手法にはほとんど在来の日本の技術が使われているのである。いわば洋服を着た日本人といつたところか。これらの明治の西洋建築は、在住外国人の家か、官庁施設、或いは高級官吏、豪商、金融機関の施設に限られている。これで思い出すのは、7世紀の外国技術を輸入したときや、13世紀の同様の時期の状況である。前のときは宮廷貴族が新技術の保護推進者で、このために変わったのはこれに関係ある諸施設だけであり、庶民住宅はほとんど影響を受けていない。12世紀になつても秋田の理設家屋の例のように、新技術の影響を受けているとは思えない、古式の構法で作られているのを見てもわかる。

東福寺竜吟庵



14世紀 * 京都市
内部 / 天井の棹縁は最古のもの。床に回しタタミが使われている。右手の障子がひと筋子持ち引ちがいの障子。
部分 / ひと筋引ちがいのディテール。



後のときは、中央の産業統制が弱まり、民間産業が台頭してきた変動の時代であり、また日本建築のオリジナルが成立したときではあるが、室町時代までは輸入技術もその変革も、上層階級のための施設に限られていた。洛中洛外図で見る庶民の家と、現存するこの時代の建物との間には、かなりな隔りを感じさせるし、有名な木割書である匠明の著者は、百石取りの大棟梁で、内容も寺社殿舎に限られ庶民の家は全く対象にしていない。

一般の農家や町家は、いま民家といわれて観光資源化しつつあるが、対象にされている建物の多くは、幕府権力が後退した19世紀以後に建てられたものが多い。

桃山時代以後明治までの庶民住宅は、畿内の上層支配階級に属する家を除いて、寺社殿舎に代表される輸入技術とその日本化への変遷で画かれた、体系化された流れに連続するものとして取り扱うことはむづかしい。

むしろ各地域が持つた、それぞれ固有の産業や政治経済の事情とか自然環境の中から、独自に発生して産業交易の活発化とともに、中央文化の影響を少しずつ受けながら成長したと考えるのが妥当であろう。

現在も各地に残されている、地方文化の名残りは、それぞれきわめて個性的であり、体系的に均質化された権力支配層のそれとは、明らかに文化的特質を異にしているのである。

こう考えてくると、輸入文化の影響を受けながら変遷を重ねていたのは、もの文化の強い支配下にあつた一部の

権力者層であつて、その権威が強力に維持されていた時代には模倣文化的色彩が強く、それが弱まるにつれて日本化への傾向が高まつてくる。さらに経済などの実権が下層の商人や農民の手に移行するにしたがつて、多様な地域特性を生むという経過であることがわかつてくる。最も良く地域の文化特性が発揮された時代は、幕末から明治にかけてであつたとしていいようである。その後関東大震災を契機として、わが国の建築界は一層西欧化への傾斜を強めることになつた。

まず中部ヨーロッパに起こつた国際建築運動が、当時わが国で盛んに提唱されていた生活改善運動と結びついて、合理主義建築を標榜する分離派などの建築活動を盛んにした。人間の生活にとつて物理的な条件は世界中同じであり、建築をものとして捕えた場合には、多様な形は必要としないという論理を基本にしていたから、これは官僚統制にとつてはきわめて都合のいい提案であつた。構造と防火を最優先させるという市街地建築物法は、建築を物理的に割り切ることを正当化する法的根拠になつた。

こうしてせつかく芽生え定着しようとしていた地域文化は、中央官僚の西欧化主義によつて法的裏付けをもつて再び統制されることになつた。世相は大正デモクラシーを謳歌する時代ではあつたが、一方富国強兵を国策とし一部の軍需財閥を除いて大衆の生活は苦しかつた。

国際建築運動が提唱する合理主義・機能主義・無装飾主

円覚寺舎利殿



15世紀*神奈川県鎌倉市
唐様の典型。貫が使われ堅羽目になる。

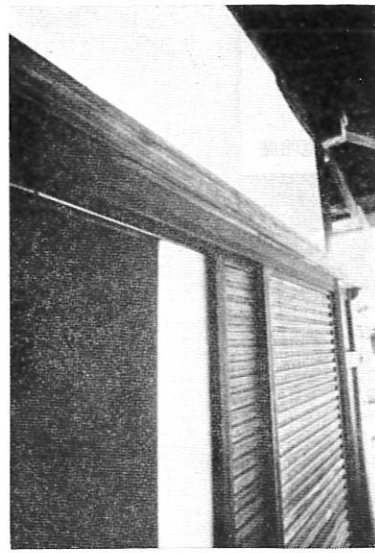
義は、こうした社会状況にもよく合っていたので、時代の先端をゆく思想としての指導性を強めていつたが、これが西欧もの文化思想そのままであるし、建築をもの化してゆくための論理であつたことに気が付いた識者は少なかった。

この科学主義建築思想も形だけのものであつたことは、白い豆腐のような一見ヨーロッパ風の近代建築も、木造の場合は在来の軸組構法で作られていた。これは明治の建築も、特例を除いて煉瓦壁に和小屋が組まれていたり、英国風ハーフラインバーも裏には松丸太が掛かっているのと同様で、わが国の木構造が成り立っている産業構造の背景が、思い付きの改革程度で簡単に变化するほど浅いものではないことを示している。

奈良時代後期から平安にかけて行なわれた野屋根構法の採用も、わが国の固有技術が輸入技術を駆逐しようとする意志の現われと見ることもできるのであつて、こういう見方をすれば、この一連の変化は、輸入技術の変遷というより、固有技術の回帰的な復帰としたほうがいいのかもかもしれない。

戦後の建築界は、自由民主主義を憲法にも謳いながら、戦前の国際建築思想の延長上にあつて、思想的にも体質的にも軍国主義時代と少しも変わっていない。建築の技術は、物理的性能の絶対優先主義による強力な官僚統制と、権威主義のもとにあるし、画一化だけが目的の規格化は資本の集約化を助成している。建築をものとして認

慈照寺東求堂

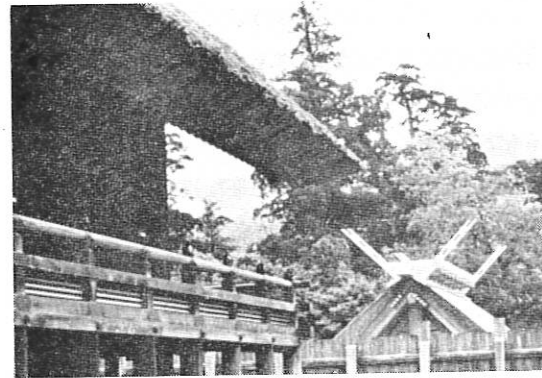


15世紀*京都市銀閣寺(カット写真とも)
外観/義政の東山殿の遺構。最古の書院造り。
部分/障子と舞良戸の引ちがい。鴨居が付樋端。

識することで、産業の工業化指向を正当化し、大資本の市場支配を強化しようとする現状は、ちょうど中央官僚と荘園領主の強力な支配下にあつて、輸入技術の模倣を強要されていた、奈良時代末期の状況とよく似ている。面白いことに、何時の時代でも、新技術の輸入推進者はその時代の官僚や支配層に属する人達であつた。それに抵抗し体質に合わない部分を排除して、固有の文化に仕上げたのは、これに代わつて力をつけた下層の地域技術者達であつたことは、数々の遺構に残された技術変化の跡と、産業構造の変動の歴史が、見事に同じサイクルで波状的に移行しているのを見れば明らかである。

しかも一度手に入れた権力の座を、できるだけ長く維持しようとするのは、人間の心情として無理もないことではあるが、一見進歩的に見える輸入技術の推進者達が、実は最も保守的な、状況判断に対する柔軟性を欠く人々でもあるということも、また歴史上の事実なのである。奈良時代官営組織が強力な支配権を保つていた間は、建築もほとんど目立つた変化は見せていない。平安にはいつて宮廷に代つて荘園領主が支配権を握ると、建築も輸入技術から脱して日本化の傾向を見せはじめるが、輸入技術によつて確立された権威を捨て去ることはできない。平安末期に座の結成によつて、独自の位置を確保した技術者達は、中世に個性豊かな建築を完成させるために、積極的な活動を行なつたが、このとき再び輸入した新技術は、特定の宗派と結び付いて、その権威を確立さ

伊勢神宮正殿



手前が旧殿、垣の向うが造替後の新殿。新殿の白木が輝くように美しい。

せた。近世以後は、こうして獲得した権威の座を、寺社や権力者と密接に結びつくことで維持しようとして、排他的で秘密主義に固まつた、木割書に代表される流派の中に閉じこもつてしまつた。その結果はよく知られているように、沈滞し固定化した江戸時代になるのである。

4.4 住宅産業の体質

論理は経験によるしか立証できない。どんなに整然とした論理的展開も、実験の裏付けをもつてはじめて正否が実証されるのである。したがつて事実の裏付けのない論理は、空論でなければ推論にすぎないといわれても仕方がないだろう。

論理科学は、予測の精度をあげるために発達した。太平洋戦争の勝敗は、米軍の統計学の活用によつてきまつたともいわれている。事の真疑はとにかくとして、戦後のあらゆる分野に渉る統計手法の利用は、この道具の有用性に対する信頼度の高さからであることは間違いない。この統計学の盛んな流行が、予測への期待からであることはいままでもない。いまや現代の工学・経済・病理・生物などほとんど全ての学問分野で、実験や測定結果から法則性を発見しようとするとき、統計学のお世話にならない研究者はいないだろう。

学問的研究の成果が、対象の持つ法則性の発見にあるといつてよい状況は、未知の結果が予測できるという、太古以来人類にとつて最も興味ある課題に対して、最も直

接的であるという点では、当然であるといえるかもしれない。しかし同じ米軍がベトナムでは敗北しているのである。

統計的予測が正であるためには、計測される対象が、常に同一の状態を反復するという前提が必要である。言い方を変えれば、かならず同じ状態をくり返す対象にしか使えないということでもある。したがつて統計を利用するのは、むしろそれが反復性を持つものであるかどうかを判断するために、確かめる道具としての効用にある。いずれにせよこうした道具の利用とその結果には、かならず得ようとする目標との関連で、経験的判断を必要とするのであつて、特に工学が目的達成のための手法を発見する学問であり、技術がその実現のための手段であるとすれば、目的のない工学技術などはあり得ないということにもなる。工学が持つ法則性は、一見確かなように見えても、そこにはこうしたさまざまな人間の判断や選択を経てるのであつて、純粋に物理的で汎用性を持つた法則などは数えるほどしかない。

こう考えてくると、予測も法則も、それを使う者がそうであると信ずることではかないということにもなる。これでは宗教と同じになるが、どうも人間のやることは形こそ変わつても、その本質は太古から余り変わっていないようである。よく現代は昔とはくらべものにならない早さで進歩している、という話を聞くが、果して本当にそうなのだろうか。

現代文明の象徴のように言われている科学は、かつては比較にはじまり、現在は予測を目的にしているといつていいだろう。比較のために分類が行なわれ、認識の正確さを求めて、構成因子に分割し、因子性状を解析する手法として統計学が利用され、やがて仮説としての因子性状の法則が拡大解釈されて、法則=予測という占師か呪術師のような役割を期待される、といつた順序で発展したが、本来は現象の正確な認識が科学の目的であつた。認識の正確さを立証する過程で、予測に類する判断が行なわれることがあるが、多くの場合特定の仮定条件における可能性として説明される。

未来を論理的に予測できる手法を、まだ人類は発見していない。とすれば最も正確な未来への可能性が予測でき

るのは経験しかないということになる。

よく割り切るとか見切るということがいわれる。これも科学的思考法が、さまざまな段階で必要としていることで性状認識の明快さを求めようとするときに、欠くことのできない手法であるし、統計学で使う級別などの分割法もそのひとつである。これが独断と偏見以外の何ものでもないことは、周知のことであろう。

未来予測が、経験と独断で行なわれていることでは、昔も今も少しも変わるところはない。むしろ現代のほうが統計的予測という、仮定の未来観に信頼を置きすぎているから、それがなかつた時代より、独断性が強いだけ危険であるということはいえるだろう。

強力な官僚統制下にあつた奈良時代の建築には、ほとんど見るべき変化がなかつたということは前述した。これが中国、或いは朝鮮の模倣時代であつたことは、歴史上の事実である。模倣が前例を写すということでは、一種の経験主義としてよいだろう。だが同じ経験主義でも、経験を他人にまかせて結果だけを受け取るのと、自律的な試行錯誤によつて結果するのでは全くその質を異にする。模倣が前者であることはいうまでもない。

ただこの時代の官僚統制は、官営の建物に限られていたようなので、それ以外の一般住宅は、統制外にあつて自由に試行錯誤していただろうが、残念ながらこれを具体的に示す資料がないので実証はできない。

平安時代になると、中央の権力が弱まり荘園領主が実権を握る。この時代にはかなり自主的と思われる変化が、建物の細部表現に認められる。ちょうど同時代に作られた、中国の建築技術書に营造方式というのがあるが、これに載っている技法表現と、平安の遺構とはほとんど一致しないところからみると、模倣から脱して自律思考の段階にあつたといえるが、ここで注意しなければならないのは奈良時代二百年間、天武以後としても百年間、見るべき変化がなかつたし、平安といえども基本的には奈良の延長上にあつたことである。

もちろんその間に若干の変化はあつたが、少なくとも营造方式の記載との関連を考えるとできない。これは輸入元である平城府が、原形を維持することによつて、指導者としての権威を守ろうとしたためではないだ

ろうか。原形に対する変化は、権力の民族的要求に対する最少限の譲歩ではなかつたか。その欲求不満が、奈良末の政治不安の一因をなしていたとすれば、その後のかなり大胆な実験の幾つかをはじめとする、独自の技術改革もよく理解できるのである。

しかしこれもしよせん宮廷から荘園領主という、権力の座の範疇であつたから、保守的固定性からの脱出はできなかつたし、当然一般民衆とは無縁であつた。秋田の埋没家屋は、同時代の金色堂や白水、高蔵寺阿弥陀堂（いずれも東北）とくらべて、その技術的関連性を求めることはむずかしい。

これを改革するためには、再び権力が主体である技術導入、つまり新技術の模倣が必要であつた。重源の天竺様を採用したのは東大寺であり、動機として彼の「入宗三度」という経歴が買われたといわれている。栄西の唐様は、禅宗を通じて幕府の強力な庇護を受けた。この唐様が、禅宗を通じて幕府の強力な庇護を受けた。この唐様が、栄西がともに宗で学んだ技術者を伴い、建仁寺にはいつたので、以後唐様は建仁寺という権威が確立された。このために江戸末まで厳格に様式を保ち続けた。権威の固定化である。

平氏が宮廷勢力を失ないつつあつたとき、東大寺か或いはこれに関係ある公卿達が、新しい技術に権威の回復を賭けたことは想像できるし、一方革命に成功した鎌倉幕府が、旧来の荘園領主を圧倒する新たな権威として、禅宗および唐様を庇護下に置いたのも当然であつた。

重源の没後栄西を二代勧進にしたのは、天竺様の抹殺という政策が背景になかつたとはいえないのである。

中世になつて、領主の従属から解放された建築技術者達が閉鎖されて固定化した環境から脱出して、新技術の刺激を受けながら自由な発想に思うさま腕を振るつたであろうことは、数々の遺構からも推察できる。もちろんこの頃から自立専門化の道を歩きはじめた、農民出身の庶民技術者の存在も無視できない。

これらの新しい時代を担つた技術者達も、やがて近世にはいと、蓄えた財力の保持と獲得した技術を権威付けるために時の権力と結び付くのは、建築という業種の宿命なのだろうか。権威を維持するためには保守的な体制を固めなければならない。木割書の成立は、技術の普遍

化を目的にしたのではなく、流派の権威付けのために書かれたことは、その内容を見れば明らかである。

室町以後の社寺建築が、活気を失なつて固定化してしまつたのは、徳川幕府の御用建設業に対する強力な官僚支配のためであることはいうまでもない。

この時代でも一般庶民住宅は、幸なことに官僚統制の外にあつた。もちろん禁令などによつて、建物の規模など若干の制限はあつたが、禁令を出すほど庶民の生活は向上していたということでもある。室町以後になると、庶民住宅の遺構もわずかではあるが残っているのが当時の様子の片鱗をのぞくことはできる。

これらの一般住宅を、社寺殿舎の流れに乗せることはむづかしいことは前述したが、全国に散在する庶民の家をひとつの体系に結びつけることも困難であるほど、自由でそれぞれが地域的独自性を発揮しているのである。それが最も盛んであり、技術水準も中央の権威に匹敵する

高さにあつたのは、前述したように幕末から明治にかけてであつた。

官僚統制と権威の強化が、固定化と画一化を意味することは、歴史の示す事実である。さらに輸入技術は官僚的権威につながりやすい危険性を持つていることも前述したとおりであるし、模倣が他人の経験を踏襲することであるとすれば、文化の成立が異なる生活者の体験が何の役に立つだろうか。

自律的試行錯誤だけが、地域に適合した文化を創造することができるのである。論理を体験に変えることはできない。日本の固有文化を育てた人達は、時の支配者でもなければ、官僚でも指導的権威でもない。これらの支配から逸脱した一般庶民であつたのである。

(筆者・武蔵工業大学教授)

低層公共住宅標準設計新系列を開発

——住宅部品開発センターが講習会を予定——

住宅建設の新しい傾向として、住宅生産工業化という大きな柱のもとに住宅の部品化・規格化が図られ、住宅生産全般の合理化が推進される一方、居住水準や規模水準等、質の向上がさげばれ、住要求の多様化に即応できるような住宅技術開発も図られている。

このような状況のもとで、財団法人住宅部品開発センターでは、公共住宅の質の向上、工業化、住宅部品の導入など、新たな情勢に対応する公共住宅の標準設計新系列（略称NPS）を開発するために標準設計委員会を設け、昭和50年度の中層に引き続き51年度は低層（1～3階）の開発を行

なつたが、その成果の普及と活用を目的として9月上旬解説書を刊行し一般に配布するとともに、9月中旬から10月にかけて、下記の各地で低層NPSの講習会を開催することになつた。

講習会開催予定地——仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡
申込先——東京都港区赤坂1—6—19
（勝永ビル）、財団法人住宅部品開発センター開発第1部
電話 東京 586—4901